

福岡城跡

—第23次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第415集



1995

福岡市教育委員会

序 文

黒田長政が築城した福岡城跡は、昭和32年に国の史跡に指定されました。現在では史跡公園としての環境整備が進められており、舞鶴公園として市民に親しまれています。史跡指定の範囲は、旧福岡城跡のうち本丸、二の丸、三の丸および、城の北側内堀の1～5号堀、城の南西側内堀の6号堀にかぎられ、城の南側と東側の堀は埋め立てられ指定地域に入っています。

福岡市では平成7年度において史跡周辺の環境整備を目的として堀の復原計画をたてており、福岡市教育委員会では、工事区域内の石垣や濠の状態を知るため事前に埋蔵文化財の調査を行いました。本書はその調査成果について報告するものです。調査によって今まで絵図でしか窺い知れなかった福岡城の南西側の内堀内壁の状態が確認できました。

本書が市民をはじめ多くの方に活用され、文化財保護のご理解を深める一助となることを願うものです。又、発掘調査にご協力とご理解いただいた方々に対して深く感謝の意を表します。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 尾花 剛

例 言

1. 本書は平成5年12月13日～平成6年2月28日の期間中に福岡市教育委員会が行った中央区赤坂2丁目所在の福岡城跡の第23次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、福岡市都市整備局公園緑地部公園建設課が計画した福岡城濠復原工事に先立ち、堀の範囲確認を目的として実施した。
3. 本書に使用した実測図の作成は井澤洋一（現福岡市博物館）、吉田扶希子（調査員）、吉永祐美子、中山飛鳥が行い、製図は吉永が行った。
4. 本書に使用した遺構・遺物写真は井澤が撮影した。
5. 本書の執筆・編集は井澤が行った。
6. 本報告書に関する記録・遺物類は整理後に福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理される予定である。

調査番号	9345	遺跡略号	FUE-23
地番	福岡市中央区赤坂2丁目270-7	分布地図番号	六木松61
開発面積	507.53m ²	調査対象面積	507.53m ²
調査期間	1993年（平成5年）12月13日～1994年（平成6年）2月28日		220.5m ²

本文目次

第1章 はじめに	2
1. 調査に至る経過	2
2. 調査の組織	2
3. 遺跡の位置と環境	2
第2章 調査報告	5
1. 調査概要	5
2. 土層	5
3. 調査経過	5
4. 遺構説明	6
5. 遺物説明	6
6. まとめ	13



Fig. 1 周辺遺跡分布図 (縮尺1/50,000)

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡城は明治4年の廃城後、1886年（明治19）から陸軍歩兵第24連隊の兵営として利用されてきた。昭和20年の終戦とともに大蔵省の所管となり、昭和32年には国指定史跡となった。しかし、戦後の復興の中で堀は埋め立てられ、又、城内には平和台野球場、競技場、国立病院、裁判所が建設され、史跡整備の障害にもなっている。福岡市都市整備局では、平成7年度の着工予定で城の南側の堀の一部を復原する工事を計画しており、平成5年度において工事予定地の事前調査の依頼があった。工事予定地は史跡の範囲外であるが、城の絵図によれば南西隅の追廻橋付近に位置するため、石垣の有無及び、堀の規模確認を目的として発掘調査を実施した。

2. 調査の組織

調査委託 福岡市都市整備局公園緑地部公園建設課

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾学 埋蔵文化財第一係長 横山邦繼（庶務）吉田麻山美

調査担当 主任文化財主事 井澤洋一

調査作業 内野久康、江口利彦、太田嘉昭、加来恭治、白石昌三、堤民孝、吹春憲治、吉田扶希子、黒瀬寿佐子、小松原澄江、高橋朗子、谷 吉美、永井鈴子、中村成美、中山飛鳥、西口キミ子、箱田香代子、堀タケ子、松永喜美子、丸田しのぶ、吉永祐美子、与那嶺照美

整理作業 福田小菊、多田映子、西口キミ子、吉永祐美子

尚、レストラン青山（山下オーナー）には、飲料水の提供をいただいた。又、都市整備局の大原主査にはご尽力をいただいた。末筆ながら感謝の意を表するものである。

3. 遺跡の位置と環境

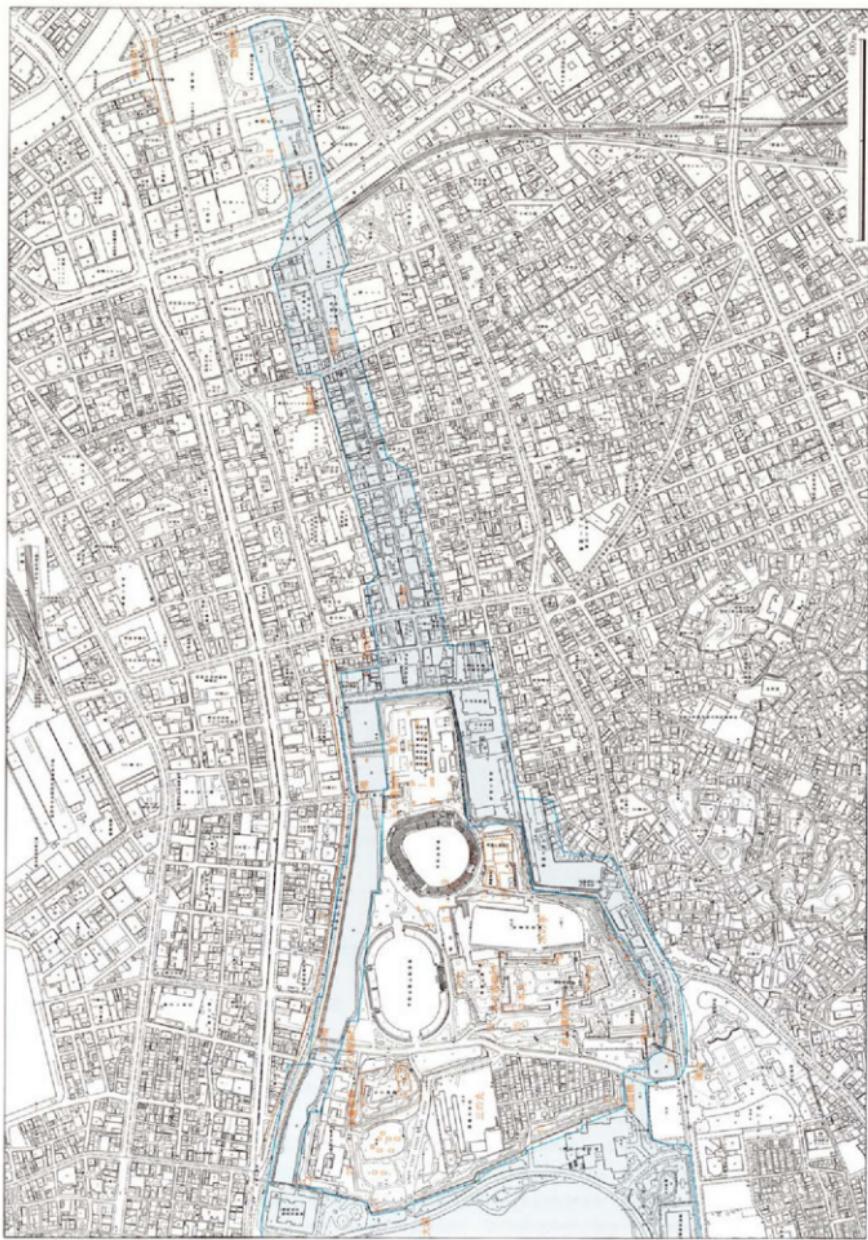
福岡市中央区に位置する福岡城は、博多湾をめぐる海岸線に向かって北に伸びる独立丘陵の先端部に立地している。福岡城一帯の小丘陵を形成する基盤地質は、新生代古第三紀の早良層群浦谷層に比定されている。築城前の地形については、現在の大濠公園は入り江、北側の内堀辺りが海岸線、東側は那珂川の沖積作用によって陸地化しており、南側は赤坂山、大休山から木丸まで丘陵が続いていた状況を想定されている。

徳川家康より筑前国を押領した黒田長政は、1600年（慶長5）に小早川隆景が築いた名島城に入城した。「筑前国續風土記」によれば、この城は城下が狭いため那珂郡警固村の福崎の地に1601年（慶長6）から7年間の歳月を経て新城を完成させたといわれる。

福岡城は現在の韓国にある晋州城を手本にしたといわれ、面積約25万m²、47の櫓、西の大堀、東側の肥前堀などを備えた大規模な城であった。

当該地は城の南西隅にあって、追廻橋の東側・南丸の南側の堀内に位置している。現在は埋立てられ、堀の南側は道路と護国神社の敷地の一部になっている。当該地は、戦前には川島女学校が建てられ、近年は学徒援護会の施設があったそうである。

Fig. 2 调查区位置图 (缩尺1/10,000) ■数字注满点数每十



Tab. 1 福岡城調査一覧表

調査番号	遺跡名	次数	地 点	調査原因	区	所在詳細	調査面積	調査開始	調査終了	報告書
6301	福岡城北	1	三の丸(測量2次)	裁判所建設	中央	城内	596	631007 640327	631111 640331	1
7605	福岡城址	2	北側内堀外壁石垣	地下鉄建設	中央	荒戸～赤坂地内	14,900	761201	771008	2
7728	福岡城址	3	楽院新川	地下鉄建設	中央	天神	500	780301	780630	2
7948	福岡城址	4	御簷屋敷	公園建設	中央	城内	2,200	790717	790811	3
8134	福岡城址	5	東側堀	ビル建設	中央	赤坂1丁目12-8	70	820317	820326	2
8343	福岡城址	6	祈念櫓	環境整備	中央	城内	36	840201	840220	
8449	福岡城址	7	肥前堀1次	天神中央公園建設	中央	天神1丁目8-1	580	840601	840612	
8533	福岡城址	8	肥前堀2次	市庁舎建設	中央	天神	150	851014	851019	4
8747	鴻臚館跡	9	鴻臚館3次	平和台球場改修	中央	城内	650	871224	880120	5・6
8829	鴻臚館跡	10	鴻臚館4次	確認調査	中央	城内1丁目1	856	880727	881210	5
8865	福岡城址	11	城西～城南内堀内壁	堀の浄化	中央	城内	265	880727	881210	7
8840	福岡城址	12	肥前堀3次	ビル建設	中央	天神1丁目6-8	650	881114	881126	8
8910	鴻臚館跡	13	鴻臚館5次	範囲確認	中央	城内	1,155	890420	891207	5
8950	福岡城址	14	肥前堀4次	市庁舎建設	中央	天神1丁目8-1	180	891011	891021	9
9005	鴻臚館跡	15	鴻臚館6次	確認調査	中央	城内	1,300	900409	910131	5
9065	福岡城址	16	月見櫓	確認調査	中央	城内	190	910301	910331	
9130	鴻臚館跡	17	鴻臚館7次	確認調査	中央	城内	1,000	910501	920331	10
9146	福岡城址	18	時晴門	確認調査	中央	城内1丁目	250	920301	920331	
9218	鴻臚館跡	19	鴻臚館8次	確認調査	中央	城内1丁目	1,670	920615	931030	
9236	鴻臚館跡	20	鴻臚館9次	確認調査	中央	城内1丁目	430	920910	930331	
9262	福岡城址	21	花見櫓	確認調査	中央	城内1丁目	200	930301	930331	
9326	福岡城址	22	広庭	確認調査	中央	城内2丁目	450	930816	940228	
9345	福岡城跡	23	外濠(多聞櫓下)	公園建設	中央	赤坂2丁目270-7	220.5	931213	940228	
9353	福岡城址	24	本丸	トイレ改革	中央	城内5丁目2	80	931215	931218	
9363	福岡城址	25	漁見櫓	確認調査	中央	城内1丁目18-2	150	940301	940331	

福岡城関係発掘調査報告書一覧

- 「史跡福岡城三の丸 御簷屋敷」福岡県教育委員会 1964
- 「福岡城址－内堀外壁石積の調査－福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集 福岡市教育委員会 1983
- 「筑前国福岡城三の丸 御簷屋敷」福岡市埋蔵文化財調査報告書第59集 福岡市教育委員会 1980
- 「福岡城肥前堀」福岡市埋蔵文化財調査報告書第131集 福岡市教育委員会 1986
- 「筑前国福岡城三の丸 第四層」(国鉄福岡市埋蔵文化財調査報告書第59集) 福岡市教育委員会 1990
- 「鴻臚館跡Ⅰ 発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第270集 福岡市教育委員会 1991
- 「鴻臚館跡Ⅱ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第315集 福岡市教育委員会 1992
- 「福岡城跡－Ⅳ－内堀内壁の調査－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第237集 福岡市教育委員会 1991
- 「福岡城肥前堀第3次調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第293集 福岡市教育委員会 1992
- 「福岡城肥前堀第4次調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第294集 福岡市教育委員会 1992
- 「鴻臚館跡Ⅲ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第355集 福岡市教育委員会 1993

第2章 調査報告

1. 調査概要

当該地は城の南西部分の堀に相当しており、西側に追跡橋が位置している。絵図によればこの周辺は、城の出隅が複雑に変化しているため堀の幅は40~50mを測る。堀は大部分が埋め立てられており、道路として、一部が復原されている。当該地の堀は護国神社の敷地の一部、或いは道路として埋められており、城側の一部約507.53m²が調査の対象となった。絵図によればこの地域の堀壁は腰巻き石垣であるが、絵図によっては石垣を描くもの、描かないものの2種類がある。「御城内絵図」1699年(元禄12)、「福岡城絵図」1757年(宝曆7)、「福岡城下絵図」1789~1801年(寛政年間)の3枚の絵図には斜面の下部に石垣が描かれており、当該地における調査ではこの石垣の存在有無の確認が大きな目的となった。

試掘調査は平成5年10月8日に実施した。しかし、埋立の際に瓦礫が投棄されているなど地盤が弱く、深さ4mにおいては湧水が著しい。よって堀の深さや石垣の存在を確認することは不可能であった。このため発掘調査に先立って山留工事を行なうことにしたが、街路や敷地入口等の関係により山留工事による掘削の深さは最大4mまでであった。発掘調査の実施面積は220.5m²の範囲にとどまった。

又、調査の終了に際してはA・Bの2本のトレーナーを設定し、堀の規模を確認した。地表から深さ6mまで掘削したが、堀底には達しなかった。

2. 土層

試掘トレーナーによって土層状況は、Fig. 3に示したように堀の埋立て時の状況を示している。地表から深さ70cmまでの第I層はバラスを含んだ客土、第II層は深さ200cmに達する黒色粘質土で、ヘドロ状の堆積物である。この層中には木の葉の厚い堆積物も存在しており、一時期において当該地が沼状を呈していたと考えられる。第III層は瓦礫層、第IV層は灰黄色粘質土である。第V層は頁岩質の風化土で、埋立のため付近の丘陵を掘削した土と考えられる。第VI層は灰黄色粘質土に瓦礫を含む層で、軟弱な層である。湧水が著しく、トレーナーの崩壊を招いた。第VI層は黑色粘質土で、比較的安定した層であることから堀内に自然堆積した層と考えられよう。上記の第II~第V層の深さは必ずしも一定でなく、場所によっては大きく変化している。又、西方向からの流れ込み状況がみられ、その間にヘドロ堆積があることから堀の埋立てが断続的であった様子が伺える。

0	I	1層 バラス等の客土
-70	II	II層 黒色粘質土
200	III	III層 瓦礫
300	IV	IV層 灰黄色粘質土
-410	V	V層 Vと瓦礫の混合土、湧水著しい
-500 (m)	VI	VI層 黒色粘質土

Fig. 3 試掘トレーナー土層様式図

3. 調査経過

調査対象地は東西方向に細長い敷地であり、北側は史跡指定地であることや、境界地に国有地の水路が存在すること、南側は道路及び歩道が接していることから安全対策上、調査対象地に山留工事を行った。矢板は出入口の関係等から長さ7mの矢板を用いらざるを得なかった。地盤が弱く、地

中梁を取り付けて安全を期したが、掘削は地表面から深さ4mに限定された。

調査にあたっては、地表から2~3mの深さまで重機で掘削し、比較的地盤の安定した面で調査区を設定した。最終的には調査区の中央に人力でトレーナーを掘削する予定であったが、これにより周囲から湧水が集中することが予想されたため、安全対策上これを中止した。

石垣の存在については、北側の城内壁に相当する地域を掘削したところ、矢板列に平行する形で石垣を発見するに至った。この石垣は後述するように石材に砂岩を用いていること、石材が比較的小振りであること、又、最下段がヘドロ状の黒色粘質土に乗っていることもあり、近現代に相当する時期の石垣と考えられる。

遺構は調査区の北側に沿って東西方向に築かれた石垣のみで、当初の目的であった堀の規模等も成果として得ることができなかった。

4. 遺構 説明

石垣 (SX01) (Fig 5)

現存で把握した石垣の長さは矢板による山留の範囲内にとどまっており、16mを測る。現存の高さは1.7mで、天場石は削平を受けていると考えられる。石垣に用いた石材は全て砂岩である。割石を用いたもので、最大の石は長さ43cm大、小振りの石は長さ14~23cm大である。石垣の法面は約17度の傾斜をもつが、上部の幅約70cmの部分は前面にせり出しており、矢板工事の影響も考えられる。石垣の基礎については根石等は見られないが、部分的に設けたグリッド内からは直径15cm、長さ65cm以上を測る杭が2本見つかっている。これらは、軟弱な地盤を安定させるために石垣の基礎として乱杭を打ち込んでいるものと推測できる。この杭は第8層の黒色粘質土に打ち込んでいるところから、福岡城の堀がある程度埋まつた状態において打ち込まれ、この上に石垣が築かれたものと考えられる。この石垣は、直接的には福岡城の築城に関連する遺構ではないことを証明している。裏込めは幅が狭く、最大幅33cmを測り、傾斜角24度に掘り込まれている。裏込石も石垣材と同じく砂岩を用いている。

Fig. 5の石垣前面の土層図では、第3層の灰青褐色粘質土と第8層の黒色粘質土層が西から東方向に流れ込む状態で堆積しており、堀の埋立てが西側から順番に進められている状況を示している。尚、石垣の上位は黒色土が覆っていたが、下位は黄褐色粘質土が堆積していたことから、この石垣は堀を完全に埋立てる以前に作られていたことを示すもので、時期の手掛りとなり得る。

5. 遺物 説明

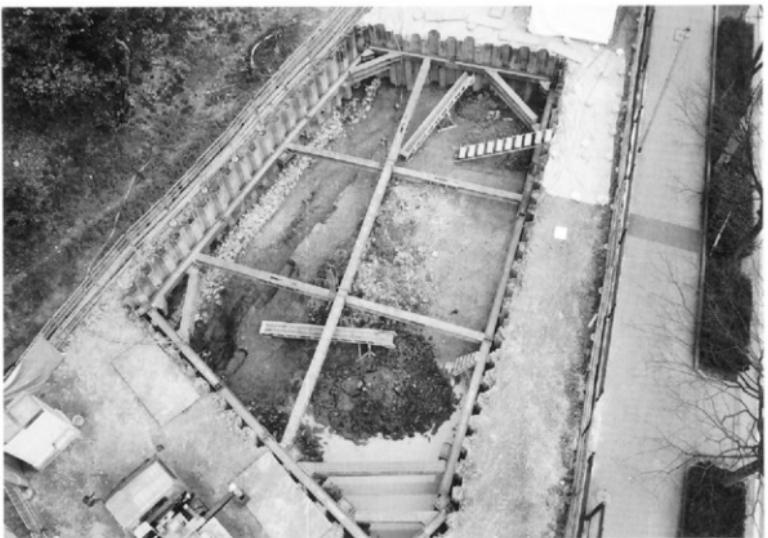
Fig. 5の第1層の黒色粘質土層から出土した遺物を一括して扱う。遺物は瓦を主体としており、陶磁器や木製品が若干出土している。

(1) 瓦類 (Fig 6・7)

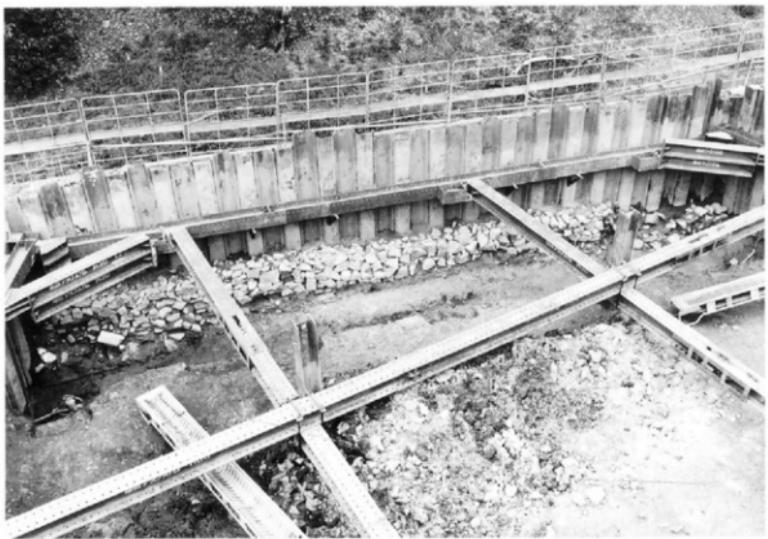
丸瓦、平瓦片が出土したが、細片が多く、実測可能な資料は少ない。軒丸瓦の出土はない。

丸瓦 (6~11) 9は現存長18.4cm、幅12.9cm、高さ6cm、玉縁長2cmを測る。前端部を欠損している。背部は丁寧なナデ調整、谷部は布目痕があるが、粗いヘラケズリが施される。縁辺の面取りは丁寧である。いぶしを施し、銀化している。10は現存長19.4cm、幅11.5cm、玉縁長2.4cmを測る。前端部を欠いている。背部はタテ方向のヘラナデ調整がみられ菱形のスタンプがある。谷部は布目痕がある。ヘラケズリ等はない。縁辺の面取りは丁寧である。いぶしが施される。

平瓦 (12~15) 14・15はいずれも破片である。厚さは14が1.9cm、15が2.0cmである。14は一枚作りの



調査区 全景（西から）



調査区内の石垣 全景（西から）

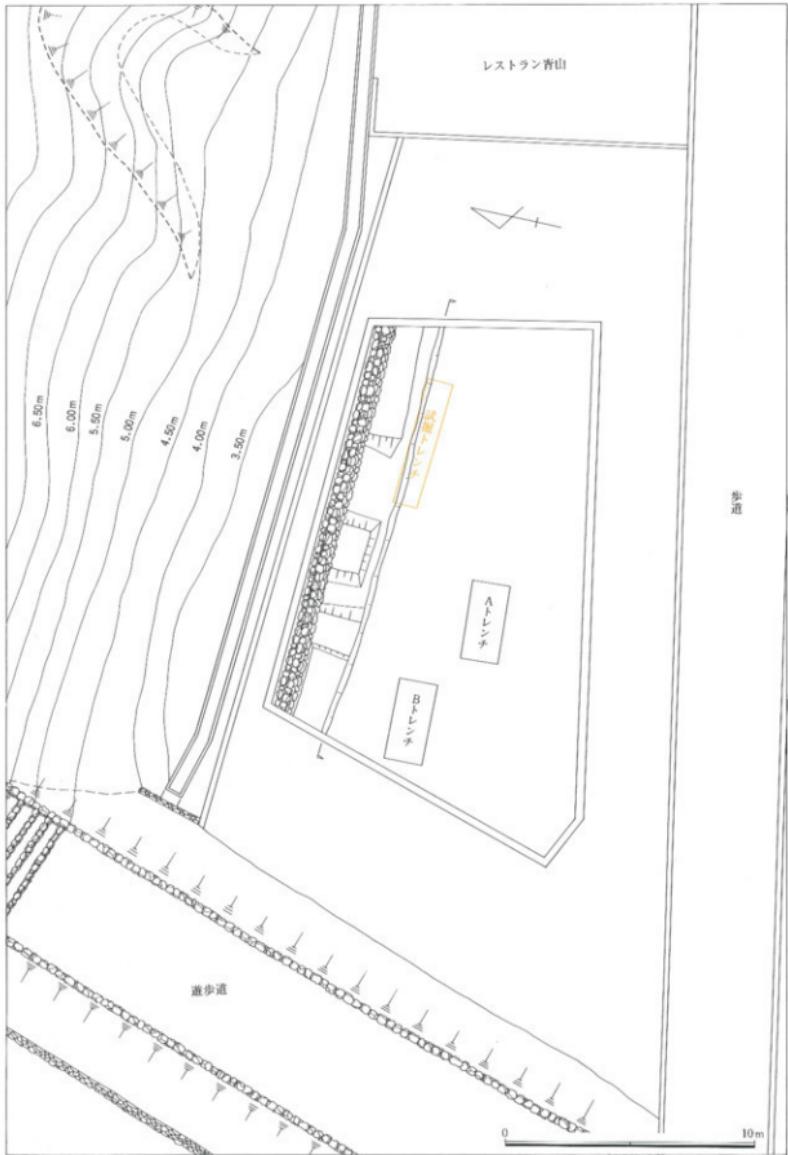


Fig. 4 道構配置図 (縮尺1/200)

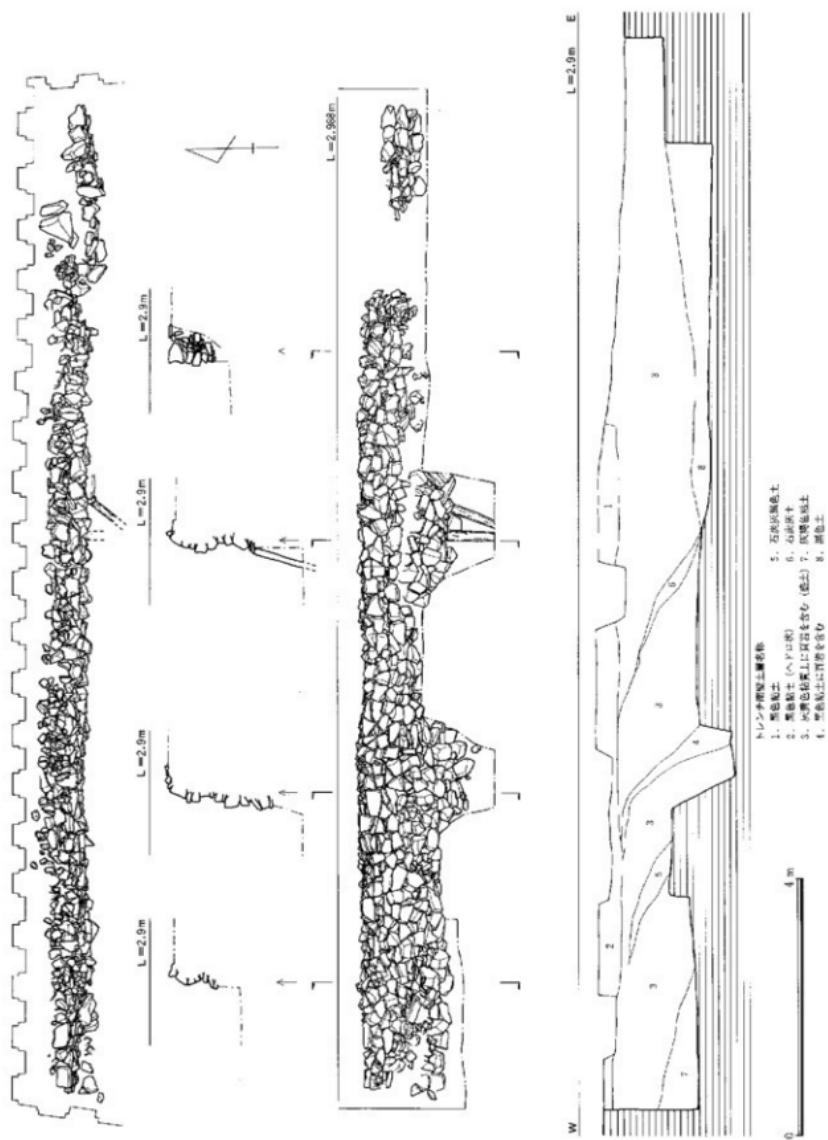


Fig. 5 石垣実測図、及びトレンチ基礎上層図 (縮尺1/80)



石垣西側（南から）

石垣下の乱杭出土状態（南から）

石垣中央部付近（南から）

石垣東側裏込断面の状態（東から）

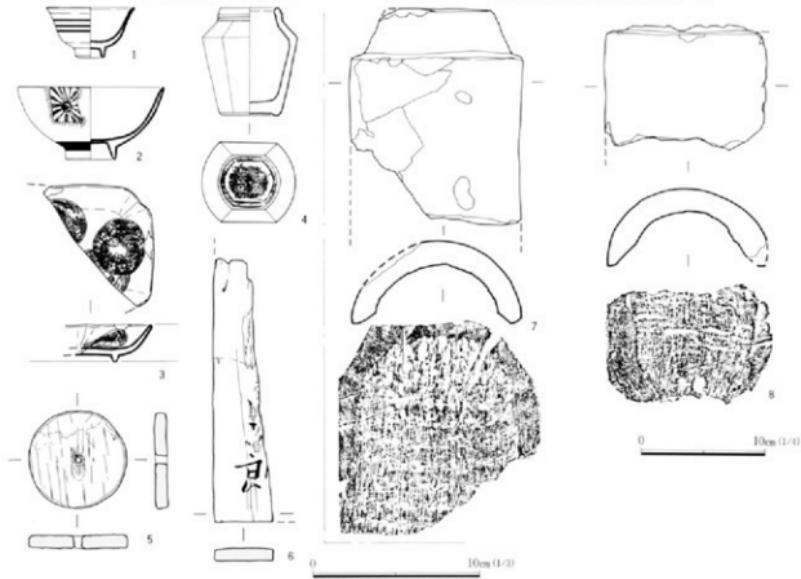


Fig. 6 出土遺物実測図① (縮尺1/3・1/4)

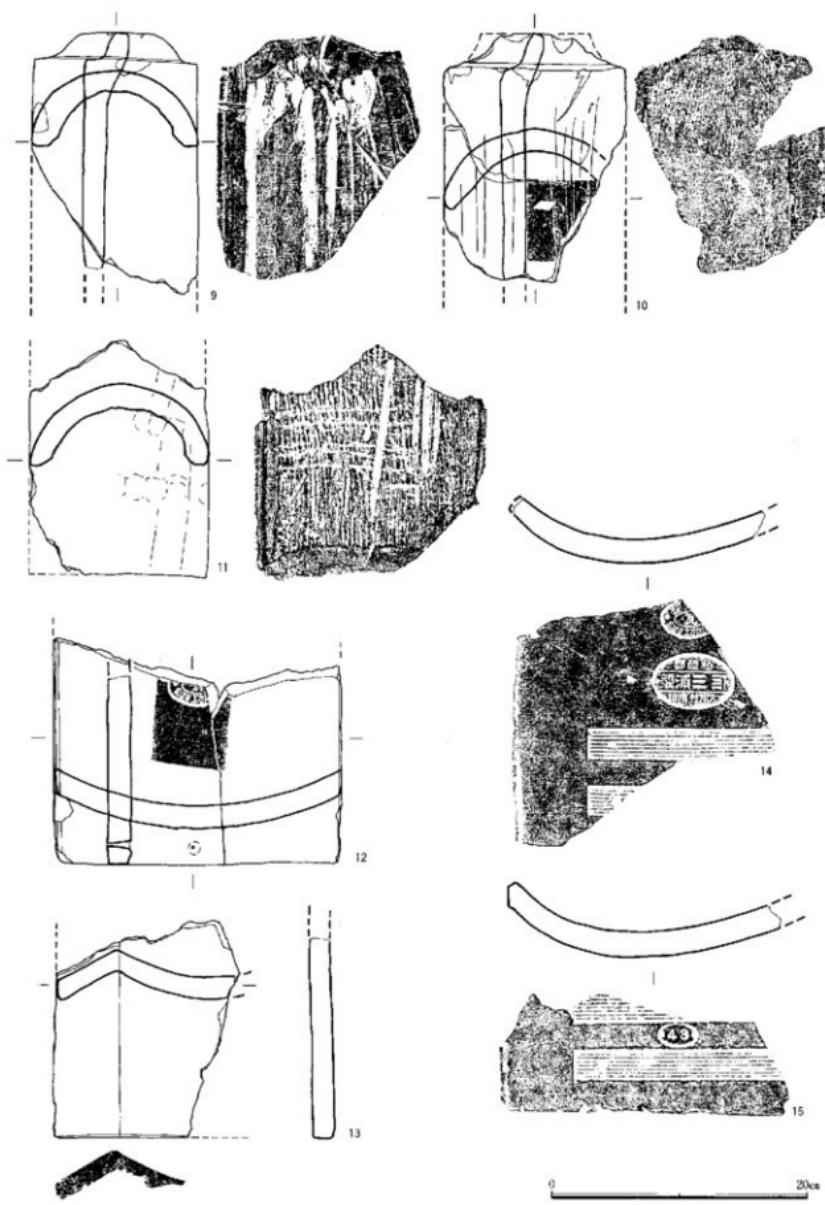
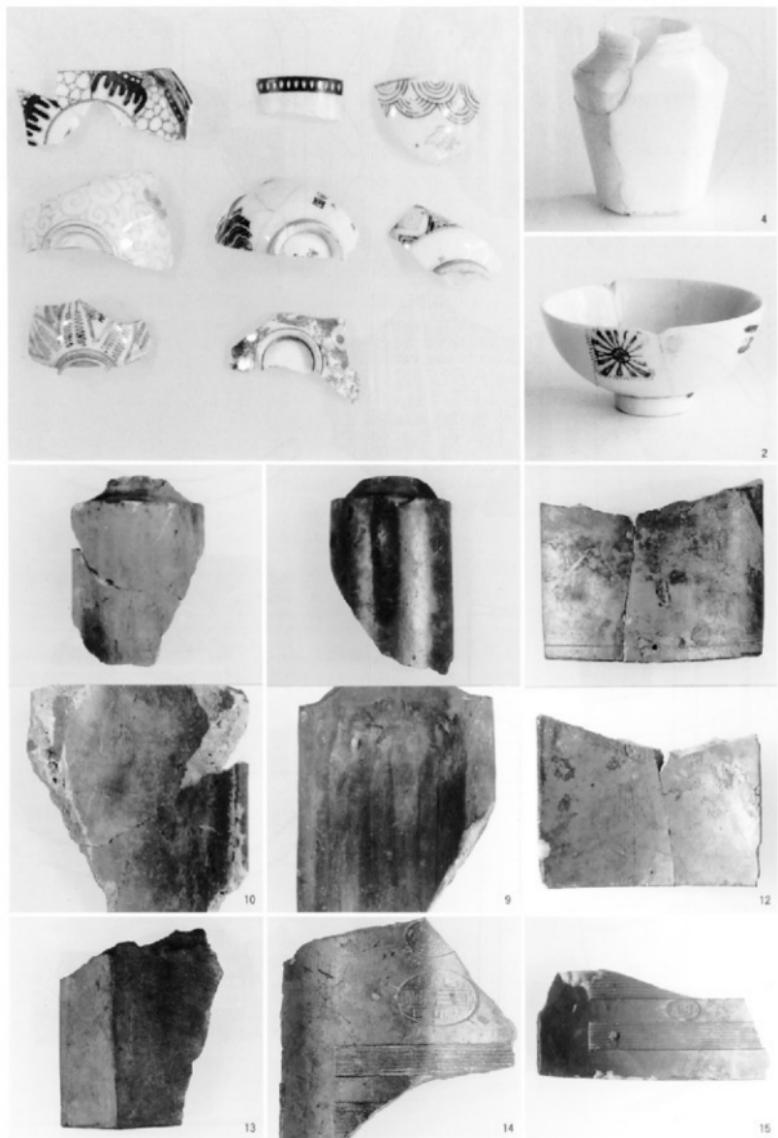


Fig. 7 出土遺物実測図② (縮尺1/4)



出土遺物

※数字は実測図番号に一致する

瓦で、縁部の面取りは丁寧である。焼成は良好で、銀化している。谷部に滑り止めを施す。背部に商標や番号のスタンプがある。15は14と同じ形状、規格の平瓦で、やはり背部にスタンプがある。焼成は良好で、銀化している。又、14・15の平瓦から組合すると、スタンプは3ヶ所あったことがわかる。スタンプの1番上は楕円形で、囲線の内側は「瓦」で、外側は「統制証・福岡地方工業組合」、2番目も楕円形で、内側を水平に3段に区切り、上から「柏屋郡」・「三浦製」・「大川村広田」、3番目は楕円形の内側に「43」の数字が打ち込まれている。この数字は昭和43年製造を示すものかもしれない。スタンプの位置については、他に谷部に押した平瓦も出土している。

(2) 木製品 (Fig. 6)

3点出土しているが、いずれも用途不明である。5は有孔円盤で、直径6cm、厚さ0.7cmを測る。孔は中心にあって、一方向から穿孔している。孔径0.3~0.5cmを測る。独楽であろうか。6は木筒で現存長23.6cm、幅8.6cm、厚さ0.7cmを測る。面取り整形をしており、片面に墨書きがある。文字は読みずらい。「□□□朗」であろう。又、木筒の上位に鉄釘が打ち込まれている。

6. まとめ

今回の発掘調査は、福岡城の南西隅に位置する南丸に向した堀の規模、及び石垣の存在有無を確認することを目的として実施したが、地盤が軟弱であることなど様々な制約を受けて当初の目的を果たすことができなかった。検出した石垣は、用いた石材が砂岩であることや割石が人頭大であること、更には堀の堆積土の上に石積みが行なわれていることなどから築城当初の石垣とは到底考えられず、出土した瓦などから近代的な要素が強い。石垣は城内からの土砂が流れ込み、自然堆積によって堀を埋め、ヘドロ化することを防ぐために築かれたと考えられ、又、一方では堀と城内傾斜面の整備を兼ねていたものと考えられる。この石垣の築造時期は明らかではないが、昭和32年頃の福岡城の地図では当該地は既に埋立てられており、史跡指定以前のことと考えられる。

堀の規模については絵図で知るかぎり幅40~50mと考えられる。深さは確認できなかったがATでは深さ5.8mまで掘削したが岩盤には達していない。但し、かなり固くしまった黒色粘質土を検出した。この層は固く縮っていることから火山灰層の可能性もある。

当該地の東側に在るレストラン青山のオーナーの話では、レストラン建設にあたってボーリング調査したが、地表下のN値は10m以上までは低かったとのことである。BTでは深さ4.8mにおいて岩盤にあたっている。岩盤は灰青色を呈し、エンボのバケットの刃がたたなかつた。但しこの地域の基盤地質は新生代古第三紀の早良層群浦谷層に比定されており、エンボのバケットの刃が立たないことは考えられないことから石垣の転石の可能性が大きい。福岡城石垣は玄武岩、花崗岩が多用されており、灰青色の岩盤は石垣の存在を推測させるものである。福岡城は腰巻石垣が特徴であり、城の南側の掻手の石垣は城北側の石垣に比べて更に低いことも考えられよう。又、西側に隣接する6号濠の復原工事の事前調査では、東側基盤が地表下3m内外で検出できたとの報告もある。以上をまとめると当該地の堀の深さは約6m前後と考えられる。西側の6号濠との間に堀底からの高さが3m程度の土堤が存在したことになるが、南側の湯地（大濠公園）と堀との掘削工事の工程や方法に重要な問題を投げかけることになるので、これについては今後の調査を待ちたい。

福岡城跡

—第23次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 415集

1995年（平成7）3月31日発行

編集・発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 アド印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南5丁目21番28号